

# ARTにおける移植胚数と妊娠率・ 多胎率との関係

日産婦の新ガイドラインは有効か否か？  
Retrospectiveな検討

Kobaレディースクリニック

○小林真一郎・山本尚子・佐藤理絵

村上ひとみ・松川真木子・元石睦郎

# 生殖補助医療における多胎妊娠防止 に関する見解

生殖補助医療の胚移植において、移植する胚は原則として単一とする。ただし、35歳以上の女性、または2回以上続けて妊娠不成立であった女性などについては、2胚移植を許容する。

治療を受ける夫婦に対しては、移植しない胚を後の治療周期で利用するために凍結保存する技術のあることを、必ず提示しなければならない。

\* 日本産科婦人科学会 会告 「多胎妊娠」に関する見解改定について より抜粋

# 目的

当クリニックでは、4年前より自主的に移植胚数を2個以内とし、さらに積極的に単一胚移植を行ってきた。今回、当クリニックで行ってきた移植胚数の制限をretrospectiveに振り返り、新ガイドラインに合致する群と合致しない群の妊娠率・多胎率を比較し、その有効性を検討した。

なお、今回の検討では、移植胚数、胚質での検討を行い、ART施行回数は考慮していない。

また、多胎の判定は2個の心拍の確認をもって多胎とした。

# 対象および方法

期間：2006年1月～2008年2月

対象：当院にてARTを施行し、胚移植を行った症例

- ・新鮮胚移植周期：626周期
- ・凍結融解胚移植周期：336周期

方法：A～Dの4群に分け、妊娠率・多胎率につき比較検討した

- ・A群（34歳以下で単一胚移植）
- ・B群（35～39歳で1～2個胚移植）
- ・C群（40歳以上で1～2個胚移植）
- ・D群（34歳以下で2個胚移植）：非適合群

日本産婦  
新ガイドライン  
適合症例

# 各グループ間の妊娠率・多胎率の比較

		移植周期数	臨床的妊娠数(%)	多胎数(%)
新鮮胚移植	A	100	45(45.0) <sup>a</sup>	0(0) <sup>b</sup>
	B	236	85(36.0) <sup>a</sup>	12(14.1) <sup>a</sup>
	C	117	13(11.1) <sup>b</sup>	0(0) <sup>ab</sup>
	D(非適合群)	173	72(41.6) <sup>a</sup>	15(20.8) <sup>a</sup>
融解胚移植	A	67	40(59.7) <sup>a</sup>	3(7.5) <sup>a</sup>
	B	125	49(39.2) <sup>b</sup>	12(24.5) <sup>a</sup>
	C	35	11(31.4) <sup>b</sup>	1(9.1) <sup>a</sup>
	D(非適合群)	109	49(45.0) <sup>ab</sup>	12(24.5) <sup>a</sup>
総移植周期	A	167	85(50.9) <sup>a</sup>	3(3.5) <sup>b</sup>
	B	361	134(37.1) <sup>b</sup>	24(17.9) <sup>a</sup>
	C	152	24(15.8) <sup>c</sup>	1(4.2) <sup>ab</sup>
	D(非適合群)	282	121(42.9) <sup>ab</sup>	27(22.3) <sup>a</sup>

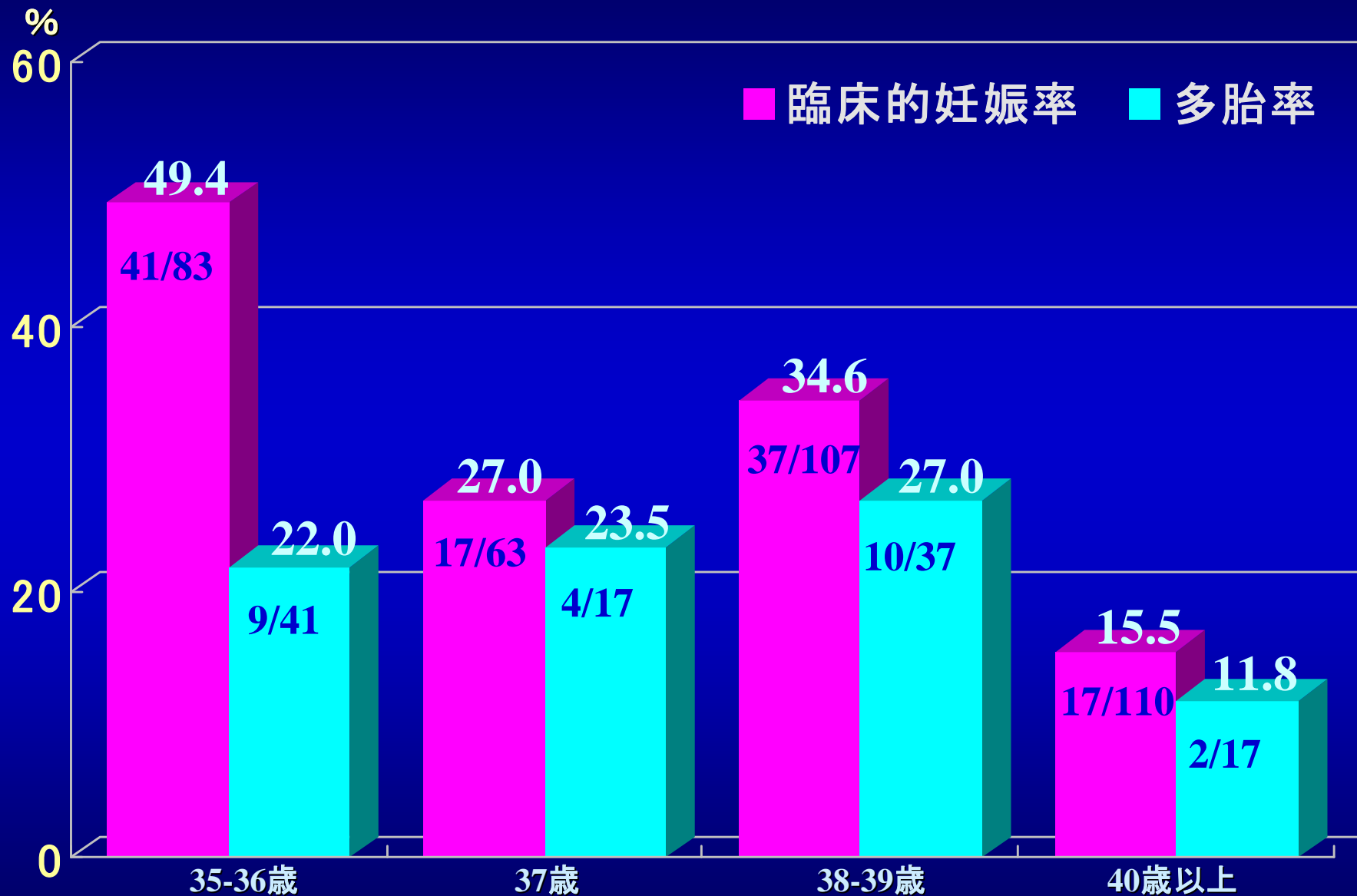
a-c同一項目内での同一カラム内異符号間に有意差あり

# 小 括

非適合群(34歳以下で2個移植)では、多胎率22.3%と高率であり、新ガイドラインに沿って、今後1個とすべきであることが明らかとなった。

又、B群(35~39歳で1~2個胚移植)でも多胎率は18%であり、年齢に関して再考が必要と思われた。

## 2個移植における各年齢層ごとの妊娠率・多胎率の比較



## 2個移植での各年齢層における胚質と多胎率の関係

胚質 <sup>1)</sup>	多胎率% (多胎数/妊娠数)				
	34歳以下	35-36歳	37歳	38-39歳	40歳以上
Day2~ G2・G+F・F2	18.3(11/60)	33.3(5/15)	10.0(1/10)	12.5(2/16)	0(0/6)
Day3 G+P・F+P	0 ( 0/ 1)	0 (0/ 2)	50.0(1/ 2)	0 (0/ 3)	0(0/1)
P2	16.7( 1/ 6)	—	—	0 (0/ 1)	—
.....					
Day5~ G2・G+F・F2	29.5(13/44)	16.7(3/18)	40.0(2/ 5)	53.3(8/15)	0(0/5)
Day6 G+P・F+P	10.0( 1/ 10)	16.7(1/ 6)	—	0 (0/ 1)	25.0(1/4)
P2	0( 0/ 3)	—	—	—	0(0/6)

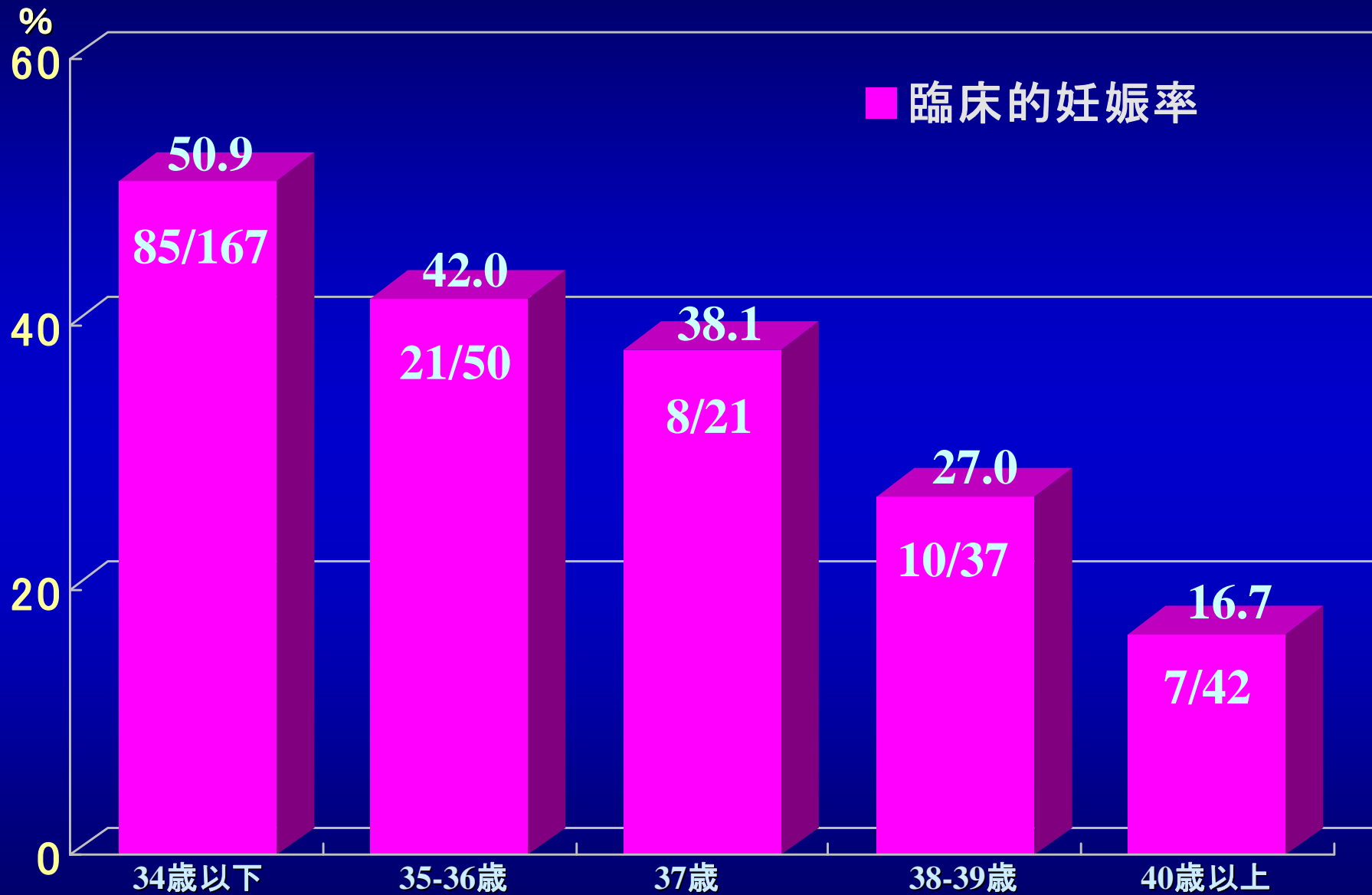
<sup>1)</sup>G2:Good胚2個    G+F:Good胚+Fair胚    F2:Fair胚2個

G+P:Good胚+Poor胚    F+P:Fair胚+Poor胚

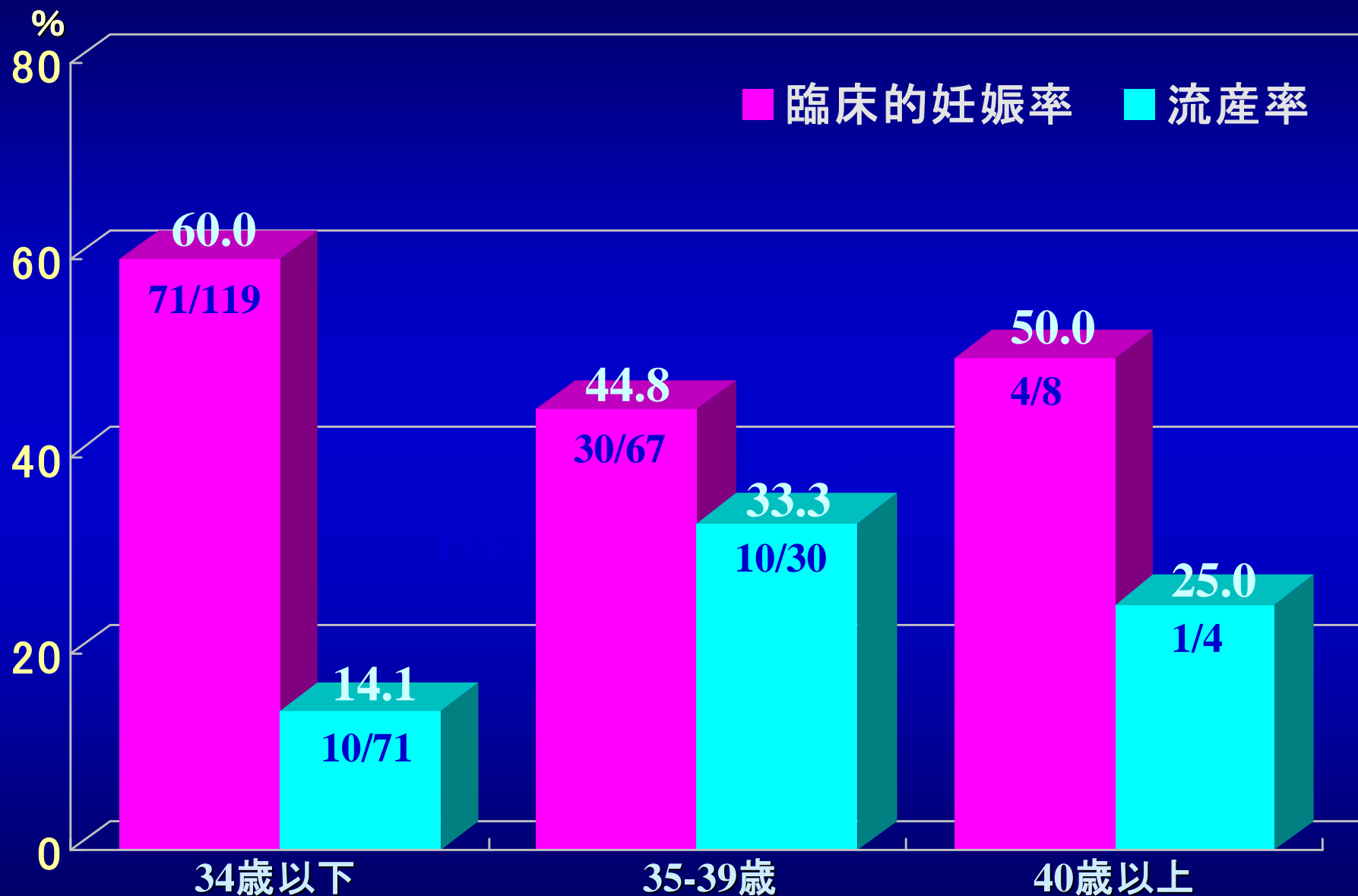
P2:Poor胚2個



# 単一胚移植における各年齢層ごとの妊娠率の比較



# 単一胚盤胞移植の臨床成績



# 総括

- ① 34歳以下の患者に対して胚移植を行う際は、1個にすべきである。(新ガイドラインに示す通り)
- ② 今回のretrospectiveな検討の結果、当院では 36歳以下の患者に対しては1個の胚移植を考慮すべきである。
- ③ 37歳以上の患者に対して、2個の胚移植を行うに際しても、良好胚、特に良好胚盤胞2個を移植すると多胎発生率は高くなるので、極力単一胚盤胞移植をする様に努力すべきである。
- ④ 多胎妊娠を防ぐ方法は、年齢に関係なく単一胚移植と胚の凍結保存を行うのが唯一の方法であると考えられた。